

續水月文庫

二二

和書門			
類	號	函	架
二	七	四	二
一	一	〇	七
七	九	冊	架

庫	文	閣	內
二〇四	二七四	一〇七	和書
函	二	七	
架			

內閣文庫	
番號	和 27421
冊數	7(6)
函號	204 162



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



服

續水月堂文集目錄

卷之

序

千城源序

文禽譜序

鮎野紀行序

感畧源序

大進物志序



明治十二年購求

舊指當のそくにきり

磐舞の口遊廊

とらぬの廊

子虫謡廊

あやしの紅紫廊

比のれり帖廊

漢字院御家園のそくにきり

比のそり又源廊

記の也貝廊

所定書集園のけにけり

寔

卷二

跋

雲花百々後廊

仙産少将齋宗朝臣身次合行

蘇の記すりれおと

雲波帖跋

いしづきの物故

石山水園故

あつりた春故

松のしづみの故

煙雲録故

名目文章故

お月詠集れりしよる

卷三

巻三脱

詞

源氏物語の箱ふさぎの詞

右梁和尚の御札の詞

玄陽の七十を賀する詞

ふらふら詠る詞

歌々

此巻の詞

此巻の詞

あゆまきみとりの記
利以朝記と牌多記
くけいとりの記
三白と牌多記
主河の像に
茂徳の像
金信石園
山形と堂

卷二

記

壬午記

癸未記

観河亭記

松むしの屋記

聚落園記

橋引棚記

卷五

消息

用子由方一類也

白毫の葉に似る

續々 白り又草一巻一

序

干城録序

しきとされ天く下きひくたかしのふくろを
くろくしあはるし神し君のたけ人恵ひ理り
あはれし時よりしあはれあはれあはれあはれあ
人れ為るるるあはれあはれあはれあはれあ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあ

わがまゝにすゝめむらさきにふらふらとくさくさ
結ゆゝゝらふゝやゝらゝしゝゝてゝゝゝゝゝゝ
業ふらゝにりれ橙のまみれあかゝあゝゝゝゝ
ならぬおゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
をゝれあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
のあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

はゝゝゝゝゝゝの帖の序

秋乃山へ下りて暮らふ麻衣ははゝゝゝゝゝ
はゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
きゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ふんじつに流るはよそもれおとさる一途かとう
下としてゆつてあけし中ふしふらふらあはれ
舟に流流も定はれりれりあけりたてあうき
つれあう一ゆかりにきあけりしとさけし
いさ井もれを記しゆあけありはあひあひ
筆にけりしあはれおほけりたてすれあうき
とけりあうにいさひん申しあれりあうき
り色流し比るあうきにすしてあわけり格のき
とけり

あうきとあけりあうきあうき
松きあうきあうきあうき
とけり

あうきとあけりあうき

あうきとあけりあうきあうき
あうきとあけりあうきあうき
あうきとあけりあうきあうき
あうきとあけりあうきあうき
あうきとあけりあうきあうき

へらうらもはしおしあしやもいかにさくはあら
遠年のさみれつてさつふまのぬる小村者水
けさみむをらせあひ出しふるあまのつらん
りおふふんもさる事とさるしはくつ
見録とらるく正敷もさる流角におさせし物より
あつてさつてさつしおさやけおつてつてつ
あつてさつてさつてさつてさつてさつてさつ
村者さつてさつてさつてさつてさつてさつ

てさつてさつてさつてさつてさつてさつ
しはあつてさつてさつてさつてさつてさつ
くさつてさつてさつてさつてさつてさつ
はあつてさつてさつてさつてさつてさつ
公はさつてさつてさつてさつてさつてさつ
さつてさつてさつてさつてさつてさつてさつ
いさつてさつてさつてさつてさつてさつてさつ
はさつてさつてさつてさつてさつてさつてさつ

争う柄を本に様々あり世にありてはこれらり
力持う能くせむわたりて地多る

死るも貝の序

梅弓や一ちれおまゝもたはるぬ海に試あひひか
もの少れはす氏入もりのつゝそこのを業とてし
若にいら海ふもれとてにうとくこころある
中ふもやとらうはるしれ海もさう始む位
はるまじれらめまもるるはるまじれら

職もさうなれつゝのつゝも人へののぶら
うとらうとてたてうらり後たまにはるまじ
あひぬれおまゝもたはるるらりかたあ
つまわらち刀の澄免れとてのまの人
おれら大方向のつゝおまゝもたはるる
ちもあつゝ記のつゝあつゝとらうとて
のほつゝをたしとて進物知とてあつゝ向
かふ申細と永射はらつゝのり業いとてし

續水月文章卷二

跋

梅苑而首後序

くにやまのふれをよひしはげしきうらみはれを臨窓
 迹懐懐る而首序をさそひしうらみのふれを
 むねのふれを閑もをさそひしうらみのふれを
 むねむけのふれを閑もをさそひしうらみのふれを
 くにやまのふれをよひしはげしきうらみはれを臨窓

このころに我内記原尚ありこれをひめりける人
きりぬる堀門耐りけるるる

あつたれ春の夜

これを見ればわにさう記せしむるあめしき君のまは
さそりてあつたれはさしはるる
司直の筆に記さるるあれはさしはるる
後にも昔の事か目録の遊ふ事なれはさしはるる
しをさしはるるあつたれはさしはるる

松の木の葉のあつたれはさしはるる
ひさしはるるあつたれはさしはるる

松の木の葉

あつたれはさしはるるの國のあつたれはさしはるる
あつたれはさしはるるあつたれはさしはるる
あつたれはさしはるるあつたれはさしはるる
あつたれはさしはるるあつたれはさしはるる
あつたれはさしはるるあつたれはさしはるる
あつたれはさしはるるあつたれはさしはるる
あつたれはさしはるるあつたれはさしはるる
あつたれはさしはるるあつたれはさしはるる

水月詠筆乃おくにけり

よきしひらみ集ふもおまゝなごやもす

唐のちのるりしにあまむもこれのちらふ

しあひのてあれしちせらふもあまれをわら

てこの細のすうらひ中らあれをらあはれ

あまのしほはるるさうさうのちのちのあま

あまのしほはるるさうさうのちのちのあま

あまのしほはるるさうさうのちのちのあま



あまのしほ

あまのしほ

